

地下壕パンフレット内容修正案

【現行】 【平成 25 年 3 月以前のパンフレット】

松代象山地下壕は、太平洋戦争の末期、軍部が本土決戦最後の拠点として極秘のうちに、大本営、政府各省等を松代に移すという計画の下に構築したものです。着工は昭和 19 年 11 月 11 日午前 11 時。翌 20 年 8 月 15 日の終戦の日まで、約 9 か月の間に当時の金で約 2 億円の巨費とおよそ延べ 300 万人の住民及び朝鮮の人々が労働者として強制的に動員され 1 日 3 交替徹夜で工事が進められました。食糧事情が悪く、工法も旧式な人海作戦を強いられ、多くの犠牲者を出したと言われています。

松代地下壕は、舞鶴山（現気象庁精密地震観測室）を中心に皆神山、象山の 3 か所に碁盤の目のように掘り抜かれ、その延長は 10 キロメートル余に及んでいます。全工程の 75% の時点で終戦となり工事は中止されました。

戦後は、訪れる人も少なく忘れ去られようとしていましたが、太平洋戦争の遺跡として多くの人々にこの存在を知っていただくため平成元年から見学できるように整備したものです。

【修正案】 【現行をベースに説明板修正案を反映】

松代大本営地下壕は、舞鶴山（現気象庁松代地震観測所）を中心として皆神山、象山に碁盤の目のように掘り抜かれ、その延長は、10 キロメートル余りに及んでいます。

第二次世界大戦の末期、軍部が本土決戦最後の拠点として、極秘のうちに、大本営、政府各省等をこの地に移すという計画のもとに、昭和 19 年 11 月 11 日から翌 20 年 8 月 15 日の終戦の日まで、およそ 9 箇月の間に建設されたもので、突貫工事をもって、全工程の約 8 割が完成しました。

この建設には、当時の金額で 1 億円とも 2 億円とも言われる巨費が投じられ、また、労働者として多くの朝鮮や日本の人々が強制的に動員されたと言われています。

なお、このことについては、当時の関係資料が残されていないこともあり、必ずしも全てが強制的ではなかったなど、さまざまな見解があります。

工事は、一日二交替から三交替で進められました。食糧事情が悪く工法も旧式な人海作戦を強いられ、正確な数字はわかりませんが犠牲者も出たと言われています。

戦後は、訪れる人も少なく忘れ去られようとしていましたが、平和な世界を後世に語り継ぐ上での貴重な戦争遺跡として、多くの方々にこの存在を知っていただくため、平成元年から壕の一部を公開しています。